

---

# 届く願いを、白球に込めて。

黒神王輝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

届く願いを、白球に込めて。

### 【Nコード】

N7993U

### 【作者名】

黒神王輝

### 【あらすじ】

野球が好きだった。

小さい頃から野球ばかりやっていた少年　小次郎は、野球を高校から辞める事を決意。

しかし、切っても切れない縁らしく、お金につられて野球部に入ってしまった。

そこでエーススラッガーとしての片鱗を見せるも、彼はマネージャーになると譲らない。

過去と向き合う小次郎の白球は、どこへ向かうのか。

主人公最強系。野球もの。女子が甲子園、プロに行ける設定。

## 序章 巽小次郎の存在

「何でだ！ 何で……やってはいけないんだ！」  
熱い、叫び。

早春の薫るグラウンドに響くその声は、紛れも無く少女の声。  
晴れ渡る麗らかな陽気の中、彼女の声は浮いている。

涙が乾いた地面に落ちて染み、それは連続して、止まらない。

「こんなに好きなのに……！ ずっと、野球だけをやってきたんだ！」

悲痛なその声が、心を突き動かす。

「女だからか……！ 女性もプロになれるんだ！ 私が……そんなにおかしいのか！ 場違いなのか！」

心の悲鳴が、体を揺り動かす。

それによつて冷めていた激情が沸騰し、溢れかえっていく。

「ソフトじゃない！ 野球が……野球がしたいんだ！ 甲子園に、私も行きたいんだッ！！」

きつと誰よりも野球に真摯で。その決意は鋼のように固くて。

俺にはそれが とても眩しく、そして羨ましく思えた。

だから

届く願いを、白球に込めて。

新品の制服は、糊の臭いが嫌だった。中学の入学式前、試着させられて鼻を摘んだ覚えがある。

動き辛いのも嫌、自由に服装を変えられないのも嫌、校則で髪を黒くしないといけないのも快くは無かった。まあ、俺は黒髪だった

けれども。

そもそも、運動部は全員五厘刈りなんて理不尽だろう。別に髪型への執着は無かったが、冬に頭が寒いのはいただけくない。ああ、ただ……水筒にお湯持つてきて食べるカップ麺は最高に美味かったか。それ以外の不満は中学にあった。けれども、もう鬱陶しい中学とも、あの実家ともおさらばだ。

学ランではなく、ブレザータイプの格調高そうな制服に袖を通し、鏡の前で長くなった髪を適当に櫛で梳く。

糊の臭いも気にならない。ウキウキはしないが、どこかホツとしている自分の顔を見て、思わず苦笑した。

中学三年の夏から伸び始めた身長は、今や百七十センチを超え、百七十五をも超えつつある。運動部に入る予定は無かったが、筋トレが習慣と化していたので、無駄に筋肉も付いた。

自分の体は充実しており、ここ最近では柔らかくもなっていて来ている。何と言うか、一度身についた習慣の恐ろしさを改めて認識した。

革製の鞆を掴んで、スポーツバックに手を

「……っと、そうだった」

もう、運動部には所属しない。

普通の青春で良い。友達と馬鹿やって、彼女でも出来たら更に良し。

一生懸命になって見ても 結局は無駄なのだから。

自嘲気味に鼻を鳴らして、そのまま個室のドアを出る。

他県の高校に入学し、今年で二十四歳になる従兄の厚意でその近所に住まわせて貰っている。築浅のアパートで、従兄の知り合いに一部屋提供して貰ったそうなのだ。何だか申し訳ない。

なので、四月以外は自分で金を稼ぐと決めた。小遣いくらい自分で稼がないのは、流石に心苦しい。学院の方も了承済みだ。

学院までは徒歩。距離にして八百メートルちょい。

俺 巽小次郎たじまじろうにとって いや、健全な男子高校生なら、特に疲れもしない距離だ。

古いタイプの無骨で重たい携帯電話を黒のスラックスポケットから取り出す。深緑色のそのの電源を切り、再びポケットへと突っ込んだ。いざ鳴り出したら、初日から目を付けられかねない。

せつかく県外まで出てきたのだ。ここは一つ、高校生デビューとやらを経験しておきたい。

「ふっふっふ……。コイツで完璧だぜ！」

秘蔵のメモ帳。中学の頃、唯一親しかった先輩に書いてもらったデビューテクニクが記されてあると言う代物。先輩の饒別らしく、今朝、「こーちゃんへ！」とのメッセージと伴に、郵便受けに届いていた。

早速、開いてみる。

「その一、明るくなるう！ みんな、笑顔になれるよ！」

その二、積極的に話しかけよう！ 最初は怖いかもだけど、大丈夫！ みんなきつと良い人だよ！

その三、爽やかな笑顔で、男女分け隔てなく接しよう！ みんな友達  
バタムツ。」

バタムツ。」

「……無理だ。荷が重過ぎる」

忘れていた。先輩、確か脳内がお花畑だったんだっけ。

何故だか寂寥感を覚えながら、そのノートを鞆へと封印する。先輩も同じ学院だったはずなので、会った時にでも返してしまおう。

「にしても……」

辺りを見渡しながら、そのオーラに気圧される。

女生徒は楽器やらスポーツバッグを手に、キラキラとした笑顔で友人達と談笑しながら歩いていた。男子生徒もまた、見るからに垢抜けない連中が駄弁りながら細い腕を伸ばしている。

もしかしなくても、俺って一人ぼっち？

「……文化部に入って、友達作るかな」

私立鳩羽高等学校。偏差値高めの高校で、小学、高校、大学を所有している金持ち校でもある。

制服が妙にフォーマルなものも、きつと格調の高さからきているの  
だろう。質の良い革の鞆から学院案内パンフレットを取り出し、改  
めて部活動欄を探っていく。

スポーツチャンバラ部に、射撃部。フェンシング部にアーチェリ  
ー部と、珍しい部活動があると思えば、サッカーやテニスなどもち  
やんとある。……何だ、ケイドロ部って。運動なのかもしれんが、  
部にするまで人気のあるものだろうか。

奇妙な部活動に顔をしかめ、それでもページをめくる。

と、ある一項目が誇張するように載せられていた。

「……ん？」

『今年、新生！ 部員来たれ、野球部！』

「って、ここはソフト部と一緒にだったんじゃない……」

どうやら、変わったらしい。

少し興味が沸いたが、今は文化部だ。

「……いや、面倒だな」

人付き合いが面倒くさい。そんな事を思った時点で、俺に友達を  
作る資格があるのかどうか、疑わしくなった。

まあ学校に行けば先輩がいる。友達作りに躍起にならなくても、  
関係と言つものは人がそこにある限り、自然と生まれるものだろう。  
そう、友達は与えられるものだ。

何処かで聞いたような言葉を内心で繰り返しながら、パンフレッ  
トを鞆にねじ込んで学校へと歩いていく。

少し遠くから見える校舎は比較的新しい。そう見えるだけで、事  
実ここは築二十年とそこまで新しいわけではないのだが。多分、金  
を掛けて状態を維持しているのだろう。

黒い大理石に金の文字で『鳩羽高等学校』と描かれた門を通り、  
校舎へと向かう。

グラウンドは広い。入学式だと言つのに、練習している部もちら  
ほらと見えている。

その中に、野球部の姿は無い。

どこか物寂しさを覚えながら、俺はその場を後にした。

通常、校長の話は長いものだ。

最近見るようになった漫画でも、校長の話は眠気を催すほどに連続するのがセオリー。なので覚悟していたし、質の良いホールの椅子の座り心地に思わず眠気を覚えていた。

だが、壇上に立った人物を見、目を瞠った。

『こんにちはー！』

若い。つーか、若過ぎ。

身体的には高校生となんら分らない。いや、それよりも低いか。小学生以上、中学生未満と言った顔と体。その童顔に笑みを浮かべ、どこで売っていたのかその体に合うビジネススーツを着ている。

もう眠気なんて吹っ飛んで、真っ直ぐ長いオレンジブロードの髪を持つ彼女に注目していた。

『私立鳩羽高等学校へ御入学頂き、誠にありがとうございます！私、校長兼理事長の鳩羽癒璃亞と申します！ えー、小難しい話は眠くなるので、止めましょう！ 何より私、敬語って苦手なんですよー！』

第一印象で衝撃を覚え、生徒や父兄の心情を真っ向からぶっ壊し、更には偉い立場だと言つのに敬語が苦手と暴露しやがった。何なのだ。

『で！ 私、今野球にハマってるんですよ！ 甲子園とか、青春の汗とか……やっぱり学校生活の醍醐味だと思っただよねえ！ ってなワケで、要求のあった硬式野球部を今年から創設します！ ……まあ、スポーツ推薦で誰も来てくれなかったけどね。ケツ！』

馴れ馴れしい！？ て言うか、思い付きだったのか野球部。不憫な。

『まーそんなワケで！ 野球部行こうよ野球部！ ああ、強い人

が入ってきてくれると嬉しいって言ったな。……以上です！  
では、良い学校生活を！ きつと楽しいよ！」

弾けるようなウイंकを残し、彼女は乗っていた椅子から飛び降りて、そそくさと走り去っていった。

まあ突拍子も無い予想外の事をされると、人間誰もが平静ではいられない。辺りは当然ざわついている。

騒ぎの所為で、厳かな雰囲気全て払拭されていた。馴染めそうにない空気が急に身近になった気がして、心が落ち着いてくる。

前屈み気味になり、目を閉じる。徐々にまどろんでくるのを感じながら、心地よさに身を委ね

ガッツ！！

「 づあつ！？」

「 痛つ！？」

堅い何かが額を直撃。多分、前に座っている馬鹿が後ろに首を動かしたのだろう。

眠りを妨げられて、苛立たない人間はいない。カツとなるタイプではないのだが、こればかりはどうにも不愉快だ。

「 ……随分と石頭だね。何を食ってるんだい？」

「 す、すまん……。今朝は鮭の塩焼きだった。それと白ご飯と味噌汁、ほうれん草の御浸し」

女子の声だ。何やら古風で流暢な言葉だったが、気にするほどじゃない。しかも、皮肉通じてないし。

「 そりゃ健康的だ、実に結構。その食生活を是非続けてくれ」

「 ああ」

その返答に満足したらしく、少女は振り返りもせず会話を完結させてしまう。

毒気を抜かれながらも、再び同じ体勢を取り、目を瞑る。

眠りは、あっさりと訪れた。

「で、気持ちよくて、誰もが教室に帰った後も寝ちゃったわけだね」

「すみません……」

「どうやら、一人だけ寝こけていたのがバレていたらしい。担任教師ではなく、何故か理事長から注意を受ける羽目になった。お陰で不良とまでは行くまいが、不真面目と言うレッテルが張られるだろう。」

招待された場所は理事長室。

しかし、理事長は二度頷いて、背伸びしながらこちらの肩を叩いてくる。

「分かるよ。退屈だよ。て言うかさ、わっかんないかなあ……ただ長つたるいクソ話なんて誰も聞きやしねえって思わない？」

何だ、口悪いな。

「ええ、そう思います……」

「いいよいよ、タメで。気持ち悪いんだよね、敬語って。ここじゃ同じ面した連中が雁首揃えてその口調で囁りやがるから、鬱陶しくて仕方ないんですよ」

う、うわあ。良いのか理事長。もちっと、こつ……あるべき姿と言うか。

とりあえずは、タメで話してみる。

「そう言う理事長も、敬語混じってるような気がするけど」

「しゃあないんですよ。日本語習ったの三年前だし、基本形をまです習得するって事で、敬語から入ったんですよ。ロスとかポストンとかにある姉妹校の理事長だったんですけど、こつちの理事長がくたばりやがった所為で、急遽戻る事になったんですよ」

裏事情が聞けた。そりゃ難儀な。

「お疲れっス」

「あー、その一言が染みる……。向こうじゃ許されてた事が、こ

「つちじゃ非難されるし。もう、国際文化をもう一度やらなきゃダメだね」

肩を竦ませ、やれやれと言った仕草を取る彼女は、まあ容姿も相俟って外国人に見える。

「ハーフですか？」

「クォーター。祖母が日本人で、祖父がイタリア人。母親はイタリア人で、父親はアメリカ人なの。この赤の強いオレンジブロンドも自前なんですよ？何がどうなってこの色になったんだか、知らないんですけどね」

そう言いながら席に座って、彼女は何かの書類を見る。

「ん」

渡された。何処かで見たような顔がそこには映っている  
って、

「俺の志願書……」

「野球、小学校と中学校でやってたんだよね？」  
部活動の履歴にそう書いてある。疑うべくもない。

木製の高級感溢れる机に組んだ手の上へ、彼女の小さな頭が乗る。

「……ね、お願い。野球部に入ってくれない？」

顔が、思わず歪んだ。

それにきつと気付いているだろう。目を細めながらも、彼女は続けた。

「ちょっと調べたんだよね。……君の実家は、何でも裏で有名なんだって聞いたんだ。てか、ジャパニーズマフィアじゃん。友達、いなかったんだって？ ああ、はいはい睨まないで下さいよ。ガキの睨みなんざ見慣れてるんで」

パタパタと鬱陶しそうに頬を扇ぐ彼女に、激しい怒りを覚えたが、堪える。ここで逆上しては、家で粹がっている連中と同じだ。堪える。

「……野球は、チームでするものだ。自慢じゃないが、俺は腕に覚えがある。でも、捕手がビビってちゃ話にならないし、急拵えの

ハリポテチームなんざゴメンだね」

「ここは県外だよ。それに、実家からは勘当されているんだよね？ なら良いんじゃないですか？」

「じゃ、マネジで」

「ああもう！ ホントお願い！ 定員がいれば、それでいいから！ ほら、お小遣いも出すよ！ 月三万で良い？ 授業料も免除してあげる！ どう!？」

凄く魅力的な提案。

実家にいた頃は、お小遣いなんて概念は存在しなかった。お年玉は全て、自分の進路に当てるとか言って巻き上げられた。金なら、腐るほど持っているのに、だ。

買い物も、親とかが勝手に持ってきたものが全てだった。バットも、グローブも、私服までもが自分の趣味でいかない。なのに、強要される勉学とスポーツの両立。正直、やってられない。

バイトを探す間でも、この話に乗っておけば……。

そんな甘い考えに、つい

「お願いします」

頷いてしまう。

後にそれが教訓となる事を、この時、俺はまだ知らなかった……。

グラウンドには、既に部員が数人。

放課後に早速、理事長に捕まり連行された。中身は空だが、スポーツバッグがないのは、何だか妙な気分になる。

「野球部志望の人は、春先から練習してたんですよ」

「その熱意が実力に出れば良いな」

小声で呟きつつ、メンバーに近寄っていく。

背は全員、百六十を超えているが……まだ、身長の変化に体の筋肉が追いついていない印象がある。ハッキリ言えば、みんな肌が焼

けていて、しかし細めだ。

その中に混じって、百五十程度の低身長を見かける。いや、あれは女か。

理事長が両手を打ち合わせると、全員が走り寄って来る。訓練された犬のようで、何だか笑えた。

「はいはいみんな！ 連れて来たよん！ 我がチームのスラツガ候補！ 巽小次郎君です！」

「ちつす、巽です。ベンチ暖めるのが好きなんで、是非ともマネジかベンチで」

スパンツ！

「……ポジションどこでも良いんで。テキトーにお願いします」  
「及第点。まあ、やる気ねーヤツですけど、ご覧の通り、体格もかなり違う事が分かるよね？ まあ、仲良くしてやってよ！」

あれ、何だか駄目なヤツ扱い？ そんな俺を失笑で迎える野球部メンバー。ああ、ヘンな会話ポジションにいかなきや良いが。

まずは、この中ではそこそこ体格の良い真面目そうな男が話しかけてくる。

「野球経験者か？」

「一応、小中続けてな」

「そうか。経験のないヤツもいるから、心強いよ。オレは西園栄治。巽……だっけ？ よろしくな。オレのポジションは三塁手」

握手を交わしていると、元気の良さそうな坊主頭が割り込んでくる。

「オレっち、早瀬和義ってんだ！ よろしくな！ ちなみに、二塁手！」

「んで、ワイが中学時代に投手と左外野手やっつた日野健介や。関西から来たんやけど、ここおもしろいやろ？ 他校の推薦に態度で落とされてしもつて、普通受験でここに来たんや」

関西弁の一番背の高い男がそう饒舌に語りながら、肩を叩いてくる。馴れ馴れしいな、この二人。

「で、あんたはどこやんの？」

「……余った場所で良い。ペーパーだよ、俺なんか」

「その筋肉でか？ それに、手の豆が潰れて……メツチャ硬そうやん。何回、バットを振ってボール投げたんや？」

その質問には答えず、自信ありげな笑みを浮かべ、胸に親指を押し当てる。

「鍛えた筋肉を鏡で映してニヤニヤするのが日課なんだ。その為なら、豆なんて幾らでも潰してやるぜ！」

「……そ、そうか。そりゃ結構な趣味やな」

引き攣った笑みが心に刺さるが、今後の立ち回りを考えれば無難……いや、もう少し考えればよかった。反省。

「ま、まあ！ 楽しくやろうやないか！ な、早瀬、西園！」

「だな」「そうそう！」

和やかな雰囲気打ち壊すように、金髪の外国人が鼻で笑った。

「まあ、優勝しなければ意味はないと思うけどネ。ミーはロイ、君はそこそこやりそうダ。よろしくナ、タツミ。ポジションはフアースト」

「異だったの。期待には添えないだろうけど、よろしく」

と、座っていた長い髪の男が、それを鼻で笑い返す。

「異、ねえ。聞き覚えねえけど、どこ中？」

「言いたくないなあ。ペーパーだから。遊んでばっかだったし」

「まあ、サボリ仲間にはなれそうだな。俺ア稲葉仁。遊撃手」

「おーよ。んじゃ、失礼」

何となくだが、こいつとは仲良くなれそうだ。

稲葉が座っているベンチに腰掛けて、早速体重を後ろに預ける。

「ま、後の面子は追々顔出しで、彼女が最後。捕手の天野<sup>あまのけい</sup>さん  
そして、女生徒が頭を下げてくる。

全員ユニフォームが間に合っていないので、ジャージだ。どこかの運動系の同好会<sup>サークル</sup>に見える。

が、そこで異変が起こった。

「何や、女に投げるんかいな」

日野が心底嫌そうな顔をする。別に女性でもプロ野球にいける時代になった。彼女がそこポジションを担う事も、特段不思議ではない。

だが、未だにいるものだ。ジエンダー意識に囚われる者が。

「ソフト行けやソフト。何で野球やねん」

「ちよつとこら、早瀬くん！ 折角きてくれたのに、なんて事言うんですか！」

「アホも休み休みにしてくださいな、理事長。あんな華奢腕で、ワイの速球捕れるワケないやろ」

表情を少し暗くする天野。

そんな様子にも気付かず、西園が腕を組んで冷静に考察する。

「確かに、肩は心許無いな。女性としても小柄な方だし……少し、アレだ」

「まあそうだよな。オレっちの中学も、女生徒お断りだったし。ソフト行けば？」

「何故だ！ ……何故、野球をやっちゃいけない！ 私は、野球をやれると聞いてこの高校に来たんだ！」

その声、よく聞いてみれば……頭をぶつけた、あの時の女生徒か。あの時の落ち着いた声はいずこかへ消え、今は苛立ちに全てを駆られている。無理もない、全権が否定されようとしているのだ。

日野はそれを嘲笑うかのように、両手を肩の位置まで挙げ、お手上げのポーズを取る。

「ホンマに、適わんわ。ワイ、こいつが捕手なら投手やらんわ。投げとうない。任せられん」

既知感。

『お前が投げるんだったら、捕りたくねえよ。……投手、辞めてくれ。巽』

……悔しかった。

自分の家柄、性別。能力とかを見ずに、外側だけを見られて、決

められる。そんなのは、使えない屑のやる事だ。

こういう差別は、やってはいけない。もう二度と、見たくない。でも、これが世の中だ。

培ってきた常識の壁は、厚い。みんな知っている、分かっているから常識は常識として迎えられる。

男子がソフトボールに専念しないように、女子もまた野球に専念をしない。これも……みんな知っている。

家がどうかと言う問題なんて、それ以前に根付いている常識だ。性別はその昔から。もう、覆しようがない。

気付けば、顔を俯かせていた。拳を握り締めて、ただ、彼女の姿を見ないように……俯く。

だが、その声を聞いた瞬間、思わず顔を上げた。

「何でだ！ 何で……やってはいけないんだ！」  
熱い、叫び。

早春の薫るグラウンドに響くその声は、紛れも無く彼女の声。

晴れ渡る麗らかな陽気の中、彼女 天野の声は浮いている。だが、彼女と言う存在は、このグラウンドで誰よりも輝いていた。

涙が乾いた地面に落ちて染み、それは連続して、止まらない。

「こんなに好きなのに……！ ずっと、野球だけをやってきたんだ！」

悲痛なその声が、冷めた心を焼き付け、突き動かす。

「女だからか……！ 女性もプロになれるんだ！ 私が……そんなにおかしいのか！ 場違いなのか！」

心の悲鳴が、体を揺り動かす。

それによって冷めていた激情が沸騰し、溢れかえっていく。

「ソフトじゃない！ 野球が……野球がしたいんだ！ 甲子園に、私も行きたいんだッ！！」

きつと誰よりも野球に真摯で。その決意は鋼のように固くて。

俺にはそれが とても眩しく、そして羨ましく思えた。

だから

「じゃ、日野。お前投げなくても良いよ。投げようとしないうツ、マウンドに置いてても邪魔だし」

彼女の頭に手を置いて、そう日野を睨み付ける。

「なっ じゃあ、お前が投げる言うんか？ どの中学か

も言われへん弱い根性無しが、投げるって言うんかい！」

「ああ、俺お前よりずっと強いし。勝負しようぜ？」

「…………ええやろ。お前さんが勝ったら、お前さんに従うわ。文句

は言わん。…………けど、お前が負けたらその女は退部してもらうて

「オーケー。三打席な」

「ハッ、一打席でええよ」

「三打席。後で吠えられても困るし」

「…………上等や。女、良かったなあ庇ってもらうて。やっさしー巽

サンに感謝しとけ」

吐き棄てながら、自分の金属バットを取りに行く日野。

天野はしばらく呆然とこちらを見つめていたが、涙を強引にジャ

ージの袖で拭って、紅い瞳をこちらに向けた。

「よろしく頼む、巽さん」

「さんはいいよ。俺も天野って呼ぶし」

「そうか。…………サインを決めよう。私の使っていたサインがある

んだが、どうだ？」

「助かるよ。んじゃ…………」

左バッターボックスには、長身の日野。

キャッチャーボックスにはジャージの上から防具を纏った天野。

マウンドには、スパイク無しの小次郎の姿があった。

「来いやあ！」

オープンスタンスに構える日野は、やる気に満ち溢れている。

天野が見るに、長い手足の所為かインコースに弱いと言う予測を立てる。今は力んでいるだろうから、特に有効なはずだと。

サインは インローに、真っ直ぐ。

ヒュッ

「ぬおっ!？」

スパンツ!

「ストライイク」

ちなみに、審判は西園にお願いした。

百三十キロは出ていたか。オーバースローでの、腕だけの投球。

日野は舌打ちし、マウンドの小次郎を睨み付ける。

(百三十くらいか……。一年でこれは結構な速度や。でも、打てん事はない。今のも、辛うじて目で追えた)

バットを握り直し、構える。

その様を見、今度は天野が思考した。

(……目は良い。なら、緩急をつけて攻撃する)

パームを……インハイに。

ヒュッ

「なっ!？」(メツチャ遅い! しかも、これは……!)

彼の顔面程度の高さがあったのだが、一気にベルトの位置まで沈み込む。結果的には脛の位置辺りで、天野は難なく補給した。

が、天野は寒気を感じていた。

平然とマウンドを土を靴でならしている小次郎を、再度見つめる。

(……今まで巽が投げた球は、私の計算通りだった。通り過ぎたんだ。ボール半分もずれてない。あの制球は意図的なのか?)

奇妙さを頭の中から追い出しつつ、サインをだす。

インコースと真ん中から内側へと外れる、シンカー。

ヒュッ

「くっ!？」

スパンツ。

「スウィングアウト。三振だ」

「わかつとるっつーに」

頭を落ち着かせながら、日野はバットを構える。

巽のオーバースローは本気じゃない。腕しか使っていない上、何処かぎこちないのだ。オーバースローが彼のフォームではない。

(舐めやがって……)

脇が少しだけ締められた。その些細な拳動を、天野は見逃さない。

(……本気で来る。一球、様子を見た方が得策だな)

アウトローへと外れるカーブ。

頷き、その通りに小次郎は投げた。球を抜くようにして投げる、

基本に忠実なカーブ。

ヒュッ

「……っ！」

キーンッ！

高らかと打ち上げられたキャッチャーフライ。落下点に構えて、

天野は余裕で捕る。

悔しそうな日野へと、西園が笑いかける。

「どうした、後一打席だぞ？」

「やかましいわ。よう見とけ」

構えなおしながら、日野は考える。

(速球派かと思いつたが……技巧派なんか？ 今までに、メツ  
チャ落ちるパーム、変化量こそ微妙やけどいやらしく手元で曲がる  
シンカー、んでよう落ちてよう曲がるカーブがあつて、どれも絶妙  
や。しかも、全部ストライクゾーンの端をかすめとる。大胆な指示  
やけど、ほとんどに通用するええパターンや。捕手も……確かに、  
逸材かもしれない)

天野はそんな中でも、冷静に思考する。

(……球種はかなり持っている。今確認されている、ほとんどの  
球を投げられると豪語していたが……本当らしいな)

そんな人間が実際にいるのかとも思つたが、今まで要求してきた  
全ての球が実用的なレベルで変化する球ばかりだった。速球も悪く

ないし、本当にエース並だ。中学なら、全国レベルだろう。

（だが、これは大丈夫なのか？）

現代の魔球　ナツクルボール。

無回転で投げられるその球は、揺らめいて見える。勢いがないので、球は非常に軽く、打てればかつ飛んでいくのだが……投手すらも変化が掴めず、捕手も捕り辛い。そんな球を打者が狙うのは非常に困難で、ナツクルボーラーはどこへ行っても嫌がられる。

（試してみるか……。見せてくれ、巽）

そのサインを見た時、小次郎は内心で嬉しそうに頷いた。

（これで、捕球の技量が見れる。安心して俺の隠し球を投げられるかが、見れるわけだ。バッテリー組めりゃ、万々歳だぜ！）

ほくそえみながら、オーバースローフォームではなく、地を這うようなモーシヨンを行う。

日野も天野も動揺したが、両者すぐに正気に戻る。

アンダースロー。足の踏ん張りが利かない今、遠心力と反動、腕の力が主なこの投法はかなり有効。

ヒュッ

（よっしゃ、ドンピシャ　！？）

日野は、思わず手を止めた。

ぐらぐらとその球が揺れたかと思えば、急激に失速、失墜する。

パームの非じゃない。まさしく、ナツクルボール。

ナツクルのサインだけを出していて、天野は正解だったと思う。

あんなのは狙えない。来た球を捕る勢いでなければ、恐らく無理だ。

日野はあまりの出来事に少しだけ放心していたが、我に帰って小次郎を怒鳴りつけた。

「アホ！　ナツクルなんて身内に投げんなや！　フォームかて、

何でいきなりアンダースローやねん！」

「別に得意球じゃねえし、いいだろナツクルくらい。大体、俺はフォームなんてその時々で適当に決めてるしな」

「な、なんちゅうヤツや……。ええから、ナツクルは無しや。あ

りや打てん。それにフォームは固定してくれ」

「注文の多いヤツだな……」

なら、アンダースローがいいだろう。このストレートの方が、早い。

天野はそれを知ってか知らずか、ストレートを所望してくる。インローの 臭いところ！

ヒュッ

「くっ！」

オーバースローよりも早く見えるだろう。浮き上がるように見えるこの球は、同じチームに投げてもらい訓練しなければ、打つ事は困難だ。

天野がクラブを慣らしながら、溜め息を吐く。

「百三十五キロ」

「？ 何や、分かるんかいな」

「ああ。……多分、あいつは本気を出していない」

「……舐めとるな」

「それでもここまで投げれるんだ。戦力だな」

「あんさんも、中々ええリードするやん。見直したで」

「ああ、ありがとう。……さて、遊び球はないぞ」

「そこまではらされちゃ、打たへんわけにやいかんわなあ……」

背筋を伸ばし、日野は深呼吸をする。

集中。全ての变化、挙動を見逃さない。来た球を弾き返す事に、集中。

巽はサインを確認していくが、一抹の不安が過ぎつた。投手としての勘だ。

(アウトロー、ギリギリに……フォークか。でも、フォークは打たれるな。遅いと目の良いアイツは喰らいつくдар。フォーク以外で落ちる球……SFFでいくか)

フォークの握りを浅くし、そのまま投じる。

「何!？」

驚いた天野の表情。球速はストレートとほぼ変わらない。

だが、日野は気付いていた。最期に見えたあの握りは　フォークだ。浅く握ってはいたが、確かにフォークだったのだ。フォークは確か、サンダーボールとも呼ばれていたが、誰が呼んだのだったか。

握りと球威から察するに、恐らくSFFだろう。

SFF。スプリットフィンガードファストボール。

ストレートよりも回転数が少なく、フォークボールよりも多く回転するその球は、球速はあるが変化量が少ない球種。訓練すれば、変化の大きいものまで使え、マイク・スコットと言う投手は数々の三振をこの球で攫っているのだ。

しかも、アンダースローでの落ちる球。あの投法で真下に落ちる変化は投げにくい。事実、投げれる連中は見たことがない。

サイドスローやアンダースローのチェンジアップもときは見てきた。でも、ヤツなら多分、正統な変化をさせてくるに違いないだろう。さっきのナックルだって投げて見せたのだから。

(変化は未知数やけど、当てたる！)

クン、とやはりバッターボックスの線辺りから変化が起こる。中々大きい。これは……いや、当てる！

「　ッ！！」

ファウルチップ。

異は、考える。

やはりと言うか、あのリーチは脅威だ。向こうが投手なだけに、変化球と球の握りも読まれていたのだろう。アンダースローでフォーク系を投げると言う曲芸染みた芸当も、見越されていたのか。

どうせ変化が分かるのならば、サインを見て決めようかと思う。彼女のリードは未熟だが、鋭く良い勘をしている。データが揃えば、彼女はきつと化けるに違いない。

(次は……真ん中、低めに外れるカーブ。これも……パワーカーブで行くか。これで、終わりにしよう)

強く握り、思いつきり……振り抜いた。

多分、またもや速球に見えただろう。だが、天野は動揺していない。指示した落下点からグラブを動かさず、こちらの瞳を真っ直ぐ見据えている。

「……っし！」

日野は勝利を確信していた。握りが見えた瞬間、それを感じたのだから。

カーブの軌道はバットで覚えている。一度見ている。だから、大丈夫だと　そう思っていた一瞬前の自分を、打ん殴ってやりたかった。

「なっ!？」

速い。これは、さっきのSFFとなんら変わらないスピード。しかも、変化量がさつきとダンチだ。こんな無茶苦茶なカーブ、

見た事　!

ズバンッ!

「ストライク!　バッターアウト!　お前の負けだよ、日野」

「ああ、別にその捕手が有能ってことはよう分かった。あんたになら、投げれる」

降参だと言つように眩き、溜息をついたと思いきや、小次郎へガンを飛ばす。

「けどな……異、お前はマウンドに立たせられへん。真剣にやってへんやる。その体格に筋肉なら、もつと球速が出るはずや」

「これが精一杯。ピアノもやつて握力もついてたし、手先が器用なんで変化球だけは得意なんだよ。それに、俺は数合わせだったはずだ。他のやつ誘って来いよ」

肩を竦めてみせるが、日野の眼光は鈍っていない。敵意は彼だけに留まらず、天野までこちらを睨んでくる始末。他の連中は、こちらを不思議そうに眺めるだけだ。

「……何でやねん。そないな実力があるのに、何で投げへんねん!」

「実力が足りてないヤツは、そうやって他人任せばっかだな。そんなにピッチングに自信がないのか？」

鼻で笑うと、その挑発にまたもや乗ってきた。短気な上に、乗せられやすい投手。……状況に左右されそうだな。こういうタイプは流れに乗れば強いが、ペースを乱されるとんで単調になる。

「な、何やとオ！？ やつたら、今度はお前がバッターボックスに入ってみいや！ ワイの実力、思い知らせたる！」

「んじゃさっさとしてくれな。一打席で良いよ。俺、別に負けたって良いし」

「こんの……！」

舌を打ちながら、日野は去っていく。天野と打ち合わせだろう、こちらには聞こえないように話し合いをしているようだ。サインの取り決めだろう。

と、ベンチにいたロイがこちらに駆け寄ってきた。バットを持ってきており、サングラス越しの眼光は何故だか優しい。

「HEY、タツミ。ユーがよけりや、これ使いな。ユーはまだ力あるシ、ミーはみとめたぜ」

「まあ普通に考えりや、実力隠すならそれなりの理由があるよな。あいつら、マジでボケばかりだぜ」

同じく歩いてきていた稲葉が、耳打ちしてくる。

「……あの馬鹿は速球とカーブしか投げねえ。速球も速い方だがお前より遅いし、カーブはタイミング外しのスローカーブ一択。チエンジアップも投げるが、偶にだな」

「何で、教えてくれるんだ？」

声量を抑えながらそう尋ねると、稲葉は皮肉気に笑い、目で日野を侮蔑した。

「あいつ、ここで練習しだして威張り散らしてたからな。付き合いってやってたけど、いい加減目障りなんぞね。潰してくれ」

「オーケー。でも、俺は生まれてから生粋のベンチウオーマーだからな。試合のときは期待しないでくれ。マネジ関係は俺がやるか

らさ」

「それやつてくれるんなら、万々歳だ。頼むぜ、小次郎」

「よろしくナ、コジロウ！　けど、トレーニングに八、付き合えヨ？」

「ああ。ロイ、仁。よろしく頼むわ」

二人に肩を叩かれ、ロイから借りたバットを握り締める。通常の規格より、少し重めか。おまけに長いので、力が要るだろう。

右のバッターボックスに入り、構えた。

その光景を見ていた日野は、舌を打ちながら仁を睨みつけている。

（あんの裏切りモン……手の内、教えたるうな。……けど、ワイかて進化したんや。速球なら、同じくらいは出るで！）

スクエアスタンスに構えを取る巽は、そのまま脱力したような構えを取ってみせる。神主打法か。

普通、あれは基礎のフォームから大きく外れているので、まず教わらない。スウィングのタイミングなどがあまりにも違ってくるからだ。

けれども、何故だか巽の拳動は自然に見えた。このフォームでやってきたと言う事実が、彼の存在で証明しているかのように。

（……負けられるかいな。あんなふざけた　）

インローに、カーブ！

（ヘナチヨコ野郎に！）

ベストタイミングで投げれた自信があった。第一球は様子見するだろうと踏んで、臭いところに敢えてカーブを投げ込む。その判断も間違っではない。

ただ、ボールが遅過ぎた。打てる確信を持たせてしまったのが、敗因だろう。

快音。飛んでいく打球は鋭く、ライナー気味に飛んでいく。その高度は徐々に増し、運動場のフェンスに当たって、濁いた音を立てさせた。

手首の力、素早く開く足。まさに一瞬で力を爆発させ、居合い切

りのように振りぬいてみせる。神主打法は難しいが、実に理に適った打ち方だ。

だから、分からない。

悔しがる日野を横目に、天野は俯いたままの小次郎を見る。

神主打法の習得まで、どこまでの努力が必要だったのだろう。あそこまでの変化球を投げられるようになるまで、どれだけの球を投げたのだろう。底知れない努力を重ねるまでに野球が好きなのに……何故、真剣になれないのだろう。

同じ打者として分かるのは、あのフォームは難しい事だ。自然なスタイルだが、あのステップの速さと選球眼は天性のセンスと努力によるもの。あれだけの芸当ができるなら、自信だって過剰にあつて不思議ではないのに。

と、天野は見てしまった。

ほんの一瞬　その刹那に、彼は悔しそうな表情をしていた。何もかもを堪え、噛み潰すように歯を軋ませている。

三振も取り、文句なしの弾丸アーチを決めたと言うのに。その喜びさえも抑えているように。

そんな……横顔を見て、天野の小次郎への考えが大きく変わっていた。

## 序章 巽小次郎の存在（後書き）

野球ものでございます。

私自身、野球が大好きです。今年はヤクルト強いねとか、十年経ったからかなとか、周期的に優勝するんじゃないかねとか、勝手に思ってます。

こんな奴いるか！ と思う主人公にしてみました。分かりやすい最強系です。

ライトノベルチックなので、まあ細かいことは気にしない（オイ

## 一章 ひた隠しの実力

鳩羽シヨツピングモール。

理事長の所有する企業の傘下にあると言つそのモール。食品やフアッションの大手が拳つて参加し、売り上げも上々。若者に人気のスポーツだと仁から聞いた。

帰り道、当の仁を誘おうかと思つたが、断られた。人ごみがム力つからしい。ロイも似たような理由で却下。日野は居残り練習、早瀬がその付き添い。西園と天野は、寄り道せずに帰るそつだ。真面目ちゃんめ。

で、小次郎は一人寂しくそのモールに行き、書店をうろつく。

お目当ての野球コーナー。その中で、目に付いた一冊の分厚い本を手取る。

『これで君も今日からマネジ!? マネージャー必携! バイブル・オブ・マネジ! 虎の巻! 買ってね!』

こう言う本は大抵、他の本を寄せ集めて刊行したものだ。胡散臭さこそマックスだが、こう言う代物のほうが助かる。他の本を読めば分かることが書かれてあるのなら、尚更。

意気揚々とレジに行き、財布を取り出す。

「五百円になりまーす!」

一気に不安になった。いや、一冊しか残つてなかつたし、い本なんだきつと。

カバーを付けてもらっている間に外を見る。夕日も沈みかけ、宵の時間がやってきているらしい。春先はまだ日が沈むのが早いようだ。

周囲を見れば、学生を結構見かける。鳩羽高校の帰り道でもあるし、他の学校の制服もちらほら。サラリーマンなどもよく通るし、本当に賑っているようだ。

と、こちらを見つげ、手を振ってくる女生徒。彼女には、よく見

覚えがあった。

「こーちゃん!」

ふにゃふにゃとした笑顔に向けてくる彼女に向けて、笑顔で応えた。

「えつと……どなたですか?」

「ふえええええつ!?!」

目に見えて驚いている彼女のリアクションに笑いを堪えながらも話しかけ続ける。

「こーちゃんではなく僕は田中次郎と言いまして、長男なのに次郎と言うネーミングに悩んでいる高校一年生なんです」

「う、嘘だよ! 絶対にこーちゃんだもん! 野球大好きなこーちゃんでしょ!?!」

「僕は山田次郎ですつて」

「さつき田中だったよ!?!」

「え、改名したんですよ。知りませんでした?」

「う、嘘だよ。そんな短い間にできっこないもん」

「人は出来ないと思ひ込むから出来ないんです。心から信じれば、きつと出来るようになるんです。なので、今から僕は岡部に変わります」

「無理なものは無理だよ! 色々な手続きがあるんだもん!」

「……え?」

「さも不思議そうにこつち見ないでよ! 私がイタイ人みたいだよ!」

「……………」

「無言で顔を背けるのも止めようよ! 居た堪れないよ!」

困惑と混乱で泣き出しそうな彼女を見、周囲の視線の生暖かさを感じて、ようやく止める気になった。面白いが、これ以上からかっても可哀相だ。

無駄に分厚いその本を、低い位置にある頭に乗せてやる。

「冗談っスよ。……大体一年振りです、綾瀬先輩」

微笑んでみると、彼女は不安そうにこちらを見上げてくる。上目遣いがまた、反則的だ。

「お、岡部さんじゃないの……？」

「何スカ、それ。俺は今も昔も巽小次郎っスよ」

「多重人格だったの!？」

妙な理解の仕方だ。まあ、ボケなのは直っていないようで、微笑ましい。

彼女は綾瀬春奈。今朝のノートを書いてくれた、脳内お花畑の天然ボケ。顔は可愛く、ふわふわとしたロングヘアが似合っており、スタイルも小柄ながら出ているところは出ている。

その所為で中学時代もかなりモテていたのだが、言動と考え方が綺麗過ぎて、クラス問わず温かい目で見られていたそう。恋愛対象にはならないが可愛いタイプだと、これは彼女の友人の談である。鞆からノートを取り出して、綾瀬に突っ返す。

「どうだった? 役に立ったでしょ?」

「いや、俺には荷が重すぎるっス」

「何ですよ! みんな友達だよ!」

「や、そこからおかしいでしょ。何スカ、見知らねえ奴に声掛けて、友達になれと?」

「そうだよ! みーんな、友達だよ! で、こーちゃんは一番仲いい友達だもん! もう会えないかと思ってたよ〜!」

嬉しそうに懐いてくる様は犬のようだが……何と云うか、可愛いというよりはやはり微笑ましい。

「ねえねえ! やっぱ、野球部なの?」

「ん、ああ。まあ」

「……大丈夫?」

事情を知っている綾瀬が、心配そうに表情を伺ってくる。

駄目だ。今度は綾瀬先輩も巻き込んでしまう。

ポーカーフェイスを作って、微笑み応じる。彼女が中学で変な目を向けられそうになったのは、自分と関わっていたからだ。

なるだけ、距離をとろう。それがいい。

「ええ、大丈夫です。それと、俺とあんま親しくない方がいいっすよ？ あの事がばれたら、先輩まで……」

「……バカ！」

ポカッ、と鳩尾を叩かれる。次に水月、胸、喉と、痛くはないものの何故か急所ばかりに飛んでくるパンチ。えげつない。

「もう……嫌だよ！ おかしいよ……家がどうとかって、それだけで……なんで、こーちゃんが辛い目に遭うの？」

何を、悲しい顔をさせているんだ俺は。

「ははっ。ダイジョブっすよ。俺、表舞台にはもう上がらないんで」

「へっ？」

「ふふーん。じゃーん！」

先ほど買った、怪しげな書物を披露してみる。

やはり、信じやすい彼女はその本に歓声を上げた。このあからさまに胡散臭い本にだ。著者には悪いが、これで騙すなんて良心が痛む。

「凄いよ！ よく見つけたね、こーちゃん！」

「だろ？ これを読めば、高校一のマネージャーだぜ！」

「凄い凄い！ 凄いよー！」

と、その動きを止め、何かを考えているらしく、頬に指を当ててそんな仕草をする。

「あれ……こーちゃん、投げる人だったよね？」

「何のことやら」

「嘘は駄目だよ！ ちゃんと私だって覚えてるんです！ びゅーんって投げてたもん！」

びゅーんて。あんた、高校生にもなつてびゅーんて。

言語能力に一抹の不安を感じながらも、小次郎は何か煙に巻く。

「はてさて。……そう言えば、あの美味しそうな動物はどうしたんすか？」



に!?! あの後、日野君はずっと投げ続けてるよ?」

「俺に関係あんすか? つか、天野が認められたし、それだけで収穫と思っつスよ?」

あそこまで出来のいい捕手を獲得できたのだ。それだけで、おおきく戦力はプラスされる。

見たところ、ロイと仁は相当の実力がある。ロイは打撃、仁は身のこなしから守備。早瀬は足が早そうだし、西園は堅実な実力とリーダーシップがありそうだ。他の私立高校でも、充分レギュラーが狙える雰囲気と風格がある。

軽々と打ったが、日野も勿論いい投手だ。怒りで球にキレがなかったものの、それ以外は合格だ。努力家でもあるようだし、安泰だろう。

あと四人。控えの投手と、外野手が二、三人程度が入れば、申し分ない。地区予選決勝までは、上手く勝ちあがれる。

けれども、そうではないらしい。いい加減めんどくさそうに理事長は溜息を吐いた。

「だーかーらーさー、マネジは候補がいるの。出来れば、投手をやってくれない?」

「ベンチから動かなくていいなら、万事オツケー!」

「そんなの置物と一緒にじゃねーですか! んなクソツタレた負け犬根性で、よく投手が続いたもんですね!」

「……なら、左翼手<sup>レフト</sup>か捕手を。どっちかなら、入る」

「………何でも出来るの?」

「まさか。ただ、投手は………なるべく、したくない」

「ペット、世間様に公開できないような不細工面じゃないでしょーが。家柄だけでビビってる腰抜け……いざとなったら、お願いね」

心の声が丸出しじゃん。いや、事実だからいいっちゃいいんだが。

「………それなら」

「お願いしますよ。ああ、そうそう。今から、ちよっと学校に戻

つてきてください』

「はあ？ 何で……」

『今月分のお小遣いです。明日は休日ですし。じゃ、待ってますよ』

そう言い捨て、通話を切られた。呆れられたに違いない。だが……それだけ、トラウマなのだ。あの……中学時代は。

表情は変えていなかったが、雰囲気を取り戻したのだろう。綾瀬は少し怖がっているみたいだった。

「何か……あつたの？」

「……別に。んじゃ、先輩。俺はこれで」

「あ……」

去っていく小次郎を、綾瀬は止められなかった。

あの時。中学生の頃に暴力事件を起こして以降の彼の雰囲気に……よく似ていたから。

そしてまた……伸ばしたその手を、払われる気がして。

午後七時半。すっかり日も暮れ、熱心な運動部が活動を終えるだろうその時間に、小次郎は理事長室の前にいた。

深呼吸をし、ノック。返事を待つ。

「どーぞー」

ドア越しの気だるそうな声に、扉を開ける。

「失礼しゃーっす」

醤油の匂いがした。

見ると、丁度割烹着を纏った中年の女性がラーメン丼を運んできたところだった。しかも二つ。

女性が去っていくのを見送り、小次郎は理事長へと向き直った。

「用件を済ませようぜ」

「その前に、ちょっと付き合つて。これ、モール出展候補の一つ。醤油ラーメン。一般人の感想が聞きたいんです。私の舌はどーにもアバウトですから」

対談用のソファアーに移動し、その机に丼を二つ置いた。

丁度腹も減つていたので、吝かやぶさかではない。是非、頂こう。

「じゃ、頂きます」

「うん。お願いね」

湯気を立てるそれに箸を突っ込み、乗せられた具材から制覇していく。

厚みのあるチャーシューは確かな歯ごたえと豊かな肉汁。焼き豚に近い。メンマは少し固めで、白葱が濃いスープと美味しい具合にマッチしている。煮卵もよく味が染みていて、これだけでも食が進みそうだ。

そして、肝心の麺とスープ。麺は黄色く、緩く縮れている。豚と醤油の風味の強さが、隠し味の鰹出汁の味を引き出せておらず、そこが減点か。それでも、十分に美味しいのだが。

「ん……。小麦粉、安物使ってますね」

「でも、喉越しと歯ごたえは結構いけてる。スープの鰹が醤油の風味強過ぎて死んでるけど、これなら五百円で食べたいと思うかな」

「おつ、結構グルメですか？ それ、三百八十円で売りに出すんですって。……ふむふむ、合格つと」

満足そうにリストへと丸をつける理事長。そんな人の意見をホイホイと採用していいものか。

麺をすする音が、しばらく静かな室内に響く。特に会話もなくそれぞれが食べ進んでいると、理事長が箸をこちらへ向けてきた。

「もう、ビビる事はないんですよ？ あんな頭スカスカのイエロームンキー風情が私の学校に楯突こうとしたら……一日もかからずぶっ潰せますから」

そんな差別用語をその日本人の前で使うなよ。

「日本国籍のロイさんまでこっちに呼んだんですから。……お願

いしますよ、巽さん」

「日野がいる。あいつや稲葉、ロイも……本来、二、三年になれば強豪校でレギュラーを取れるレベルで、他の部員もそう悪くない。俺はあの時、確かに三振とホームランを打ちましたが、それまでだったの」

「だーもう！ だったら……！」

「だから、俺はコーチをやりますよ」

「……へっ？」

意外な言葉に、理事長の動きが止まった。

「俺は指導の方が得意なんです。一人、面倒を見てた奴は今、中学生にして球速百三十キロオーバー、変化球三つの奴になってます」

「……マジ？」

「マジです。話しますか？ 俺なんかとは違い、家柄に頓着しないポジティブな野郎です」

携帯電話を差し出すが、理事長は首を横に振った。

「うん、君を調べてたら出てきたんだけどね。そうなってるとは……。柄沢信吾。ポジションは投手。両親は会社員とOLで、実質一人暮らしね。何か、君を崇拜してるみたいんだけど……何したの？」

「いや……あまりに球がしょぼかったんで、威力上げる為に投げ方とか変化球とかを独自に磨く方法を徹底的に叩き込んだだけ……」

「各都道府県から奨学金の話が出るのよ。お金まで出してくれるって。でも来年、ウチに来てくれるらしいから」

「……なんて脅したんだ？」

「いや？ 小次郎君がいるよって言ったら、目を輝かせてたよ？ 愛されてるねえ！」

「男相手にもとても嬉しくねえっスよ」

「そりゃそうね」

食べ終えると、理事長は懐から封筒を取り出し、それを小次郎に手渡した。

「……………薄っぺらく聞こえるかもしれないけど、私はこの国が羨ましいです。女性が、プロになれるこの国が……………ですから、家なんかで負けないでください」

何も言えず、結局……………封筒を受け取ってしまった。

「私も、一緒に連れてってほしいだけなの。わがまま、聞いてくれる……………?」

それにも応えられず、ただ……………曖昧に答えを濁す。

でも、甲子園を目指す心は小次郎と同じで

「……………俺も、行きたい。そして、自分で甲子園のグラウンドを踏みしめてみたい」

それだけは……………答えておいた。

帰り際、着るつもりも無かったが準備していたジャージに着替えて、夜の街を走る。

初めての街で、どこをどう走っているのかわからないが、とりあえず走っておく。そうしないと寝れなさそうだ。

(ランニングコースも決めておきたいな……………モールとは反対側に行ってみるか)

自宅から学校。その先にショッピングモール。今度は学校とは逆方向に走ってみる。

小気味よくリズムを刻み、真っ直ぐに進んでいく。

商店街があり、その横は河原だ。とりあえず河原を道に沿って進み、再び街の方に入る。

傾斜のきつい坂道があり、それを上っていく。息が少し荒くなるが、これくらいならどうって事無い。

家へと戻りながら、発見した様々な場所を覚えていく。

(戻り際にコンビニ、商店街南入り口、郵便ポスト、スポドリ売

つてる自販機……)

自分にとって必要な場所や物。これから生活する上で、それは欠かせないだろう。

もう街中を回ったかと思ったのだが、最後に難関を見つけてしまった。

「……うわ」

どこまでも続くような階段。石のそれに、金属製の手摺が付いていた。その横にはスロープがあるものの、その傾斜だとかかなりの距離を行かなければなるまい。

ならば、これを昇ろう。

「っし！」

全力ダツシユの要領で駆け上がる。

四段飛ばしで蹴り上がり、蹴り上がり、蹴り上がる！ 五十メートル五秒後半の足を頼りに、ガンガン昇っていく。

(……鍛えられるな。家からそう離れてないし、ラストに全力ダツシユを入れるか)

苦しさを堪え、速度を落とさずに上がっていく。

しばらくそうしていると、ようやく終わりが見えてきた。

終わりが見えれば人は頑張れるもので、定めたゴールへと小次郎はスピードを上げて駆け上がった。

「っしやあ！」

足の疲労と全身をいきなり使った反動で、昇り付いたところに座り込んでしまう。

辺りを見渡せば、手洗い場に賽銭箱、古そうな建造物が見え、更には深紅の鳥居があることから、ここが神社だと知れる。

境内は広そうで……これは、穴場を見つけたかもしれない。

立ち上がると、賽銭箱に五百円玉を投げ込む。最初が肝心だ。額もかなり大きめにして、ここで練習すると許可でも取るう。

「……ここで練習させてください。お願いします！」  
とりあえず拜んでおいた。

と、建物の影から人が出てくる。大人のようだが……誰だ？

「あ、どうも……神主さんですか？」

「ああ。お前さんは……見ない顔だな」

男性はこちらを値踏みするように眺め、髭を扱く。無精髭がよく似合う、風格のある男だ。

「俺、昨日に高校進学で引越してきたんです。で、ロードワーカーがてら、街を見て回って……」

「野球部か？」

鋭い目と声。

思わず萎縮してしまうが、何てことは無い。それよりも、気になることがある。

「何故、そう思うんですか？」

「筋肉の付き方だ。ジャージの上からでも分かる。それに、その手。野球をやり続けた大人なら、理解できるさ。ポジションは？」

「……ベンチ」

「お前さんのようなのがベンチなら、どんな強豪校か教えてもらいたいもんだな。言えよ」

「……投手」

「そうか。ちょっと待ってる」

再び奥に消えていく男。よく分からないが、とりあえず石段に座って待ってみる。

しばらくして、男はグラブ二つとボールを手に戻ってきた。何故か、スポーツドリンクまである。

グラブはキャッチャーミットと投手用の物だ。投手用は自分が持っている物よりも大きい。古いタイプのグラブだろう。

男はミットを手に、投手用のグラブとボールを手渡してくる。

「オレは昔、捕手だった。だが、生憎ウチには娘しかいなくてな。一人は野球をやっているがオレを避け、一人はボールなんて持ったことが無い奴だ。なので、球をここのところ全く受けていない。……投げてみないか？」

「……でも」

「好きなんだろ、野球が。お前に何かあるのは、顔を見れば分かる。オレの我侂だが、悪くないだろう。オレが認めれば、ここをお前だけに使わせてやる」

その一言は凄く魅力的で。そして、野球が好きなのも頷くべきで。

「……何を、投げれば」

「真っ直ぐだ。それも、お前の得意球を全力で。指の豆を見れば、普通のストレートを投げる奴じゃない。何か、複数持つてるな？」

「な、何でそんな事まで分かるんですか！」

「いいから投げろ。その種類全部」

「増えています」

「ごたごたウゼえ。さっさと投げやがれ」

カチン、ときて、座り込む男から距離をとり、構える。

この男は無駄に風格がある。だが、口も悪ければ愛想も悪い。胸糞だつて悪くなる。

見返してやりたい。ど真ん中直球を打ち込んで、威力で落球させてやろう。

「ケツ。……ちびんなよ、オッサン」

「ガキが。来いよ……」

座つて構える姿がやけに様になっている。そして、言い得も知れぬ安心感を与えてくれた。

この男なら、全力を受け止めてくれる。そんな気がして、止まない。天野とは違う、過信も何も無い、ありのままをこの男は体現していた。

だから、それに恥じない投球をしよう。

「んじゃ、まずはこれだ……！」

スリーフィンガーファスト。縫い目にあわせ、三本の指を掛ける。

掛け方だけがツーシーム。

薬指を心持強く、それをサイドスローモーションから……全力で！

「ふ……ッ！」

最高速度百四十とそこそこ。高校一年が投げる速度ではない。

しかも……

「ほう」

良い音を立てて、ボールがグラブに吸い込まれる。

構えたところからずれたと思ったが、それからスライダー気味に変化を起こした。握りを見せないフォームからのムーヴィングファストボール。それも、コントロールが出来ている。

球持ちは天然なのだろうか。普通の投手よりもかなり良いが……どうなのだろうか。

未恐ろしく感じながら、その男は小次郎へボールを投げ返す。

「その球、意図的に変化させられるか？」

受け取り、小次郎は答えた。

「少し沈めたり、シュートにしたりは出来るけど……他は失投気味の奴がカーブみたいになるくらいかな」

「……他は？」

「ああ。漫画でしか見たこと無いもの、見せてやるよ」  
振りかぶり、片足を上げる。

軸足は安定そのものを見せ、そのまま踏み込み、グニヤリと体をばねの様に曲げ、腕の回転とともにリリースした。オーバースロー気味のスリークォータースロー。

手首のスナップを利かせたその球は、螺旋回転をしながらミットに収まる。百三十後半だが、これは……

「ジャイロボールか。一時話題になったな」

「コツさえつかめば、誰だって投げれる。ただそれをしないのは、バックスピンのストレートの方が球が速くなるからだ」

「そうだな。しかし、その球でその速さなら、そこそこだ」

「ツーシームジャイロも出来るけど？」

「いや、いい。次は変化球だ。得意球で来い」

久しぶりだ。

「お前は変化球中心だろう。その柔らかい体と器用さだ。……何

が得意だ？」

「スライダーだ。言わなきゃ取れないかもしれない。今日顔合わせした捕手には取れないと判断して、投げなかった球だ。ナツクル取れたのは多少驚いたが」

「……本当に芸達者だな。まあいい。投げて来い」

不敵な笑みを浮かべる男のミットから、大きく外して投げる。

サイドスローから百四十近い速度で投げられた球は鋭く曲がり、構えていたミットへと吸い込まれた。ミット移動が無かったのは、こちらの制球力を信頼していることだろう。あつて間もないのに、自分を知り尽くされているかのようで、若干気味が悪かった。

「いい切れだ、変化量も滅茶苦茶だな。……本当に高校生か、お前？」

「一年だよ。……で、ここを使わせてもらうってのはいいかい？」

「ああ。が、オレの言ったとき、キャッチボールに付き合ってくれ。掃除も頼むかもしれない」

「それくらいなら。早朝と夕方か夜に来るから、その時に掴まえるなら掴まえてくれ」

「……オレは源二だ。お前は？」

「小次郎。巽小次郎。……それじゃ、また。源二さん」

その男にグラブを返そうとしたが、突っ返された。

「持つて行け。投手用なんぞ、もうオレには必要ない。手入れも面倒だ。……お前が使ってくれ」

「……分かった。ありがたく貰っていくよ」

実際、このクラブはよく手に馴染んでいた。手入れも完璧で、この重さも革そのままの色も、何もかもがこれが逸品だと示している。多分だが、思い入れがある代物だ。だからこそ、再び野球と関わることを決めた小次郎は、それを手に取ったのだ。

いざとなれば、だが。登板する覚悟はしておこう。

そう……胸に誓って。

## 一章 ひた隠しの実力（後書き）

この主人公はよくイジイジします。典型的な精神不安定の天才型です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7993u/>

---

届く願いを、白球に込めて。

2011年10月7日20時44分発行